

令和元年度事業の概要

令和元年度「肥後医育塾」年間テーマ「感染症とアレルギー」を開催

常任理事（事業担当） 片淵 秀隆

私たちにとって身近な疾患といえる感染症とアレルギー、二〇一九年はインフルエンザの大流行のほか麻疹や風疹も流行し、改めて感染拡大の予防が呼びかけられています。また、アレルギーは日本人の二人に一人が持っているといわれ、罹患者は増加傾向にあります。

そこで今年度は「感染症とアレルギー」をテーマに年間三回のセミナー（第六十七回～第六十九回）を開催します。それぞれ「食物アレルギー、アトピー性皮膚炎、じんましん、蕁麻疹」「感染症とぜんそく」を取り上げます。

第六十七回は、七月二十一日（日）にホテル熊本テルサにおいて、「食物アレルギー、アトピー性皮膚炎、じんましん、蕁麻疹予防と治療の最前線」と題して、近年、アレルギー疾患が増加する一方で、発症メカニズムや悪化の原因が少しずつ明らかになってきました。正しい知識を

持つことがアレルギー克服の近道です。その予防と治療の最前線を紹介しました。

第六十八回は、十月二十日（日）にホテル熊本テルサにおいて、「あなたもかかる？知っておきたい感染症（仮題）」と題して、近年、旅行者の発病に始まった「はしか」の流行、学校での嘔吐下痢症の集団発生、梅毒の増加など感染症の報告が増えています。主な発熱疾患、胃腸炎、性病感染について、最新の状況、予防や治療の方法などを学びます。

第六十九回は、二月二十三日（日）にホテル熊本テルサにおいて、「花粉症とぜんそく（仮）」と題して、国民病といわれる花粉症、近年では患者の増加とともに発症が低年齢化する傾向にあります。花粉症、ぜんそくの辛い症状を改善し生活の質を上げるために大切なのは何か、最新の治療方法とともに専門家が詳しく説明します。

なお、いずれのセミナーも開催後約一ヶ月後に熊本日日新聞紙面に内容を掲載する予定です。また、本財団ホームページにも掲載いたします。

総合生活情報紙「あれんじ」の健康・医学・医療・学術記事の執筆・監修

副理事長 山本 哲郎

本年度も、熊本日日新聞社発行の総合情報紙「あれんじ」（タブロイド判十六頁三十五万部発行）の第一土曜日分の十面と十一面の見開き二頁について執筆・監修を担当いたします。昨年度と同様に、メインの記事として「元気の処方箋」（最新の医学医療記事）を毎月掲載いたします。また、「子育て応援クリニックス」（小児科関連の医学医療記事）（十面）も、読者からの希望が多いとのこと、毎号の掲載といたします。「慈愛の心・医心伝心」（女性医療人によるリレーエッセイ）（十一面）はこれまで通り八回（五、六、八、九、十一、十二、二、三月）掲載いたします。「四季の風」（季節の新作俳句）は、これまで同様四回（四、七、十、一月）掲載いたします。

本年度も、「あれんじ」に掲載後全ての記事を「肥後医育振興会」のホームページに転載し、どなたでも自由に読めるようにしております。

「第十回熊本県医療人育成総合会議」の開催予定

常任理事（事業担当） 片淵 秀隆

テーマ…「医学・薬学・保健学教育の世界標準化と診療参加型臨床実習」（仮題）

米国における外国人医師免許取得試験受験資格の一つとして、卒業した大学医学部（医科大学）が世界共通の認定を受けていることが、二〇二三年の受験者から必要となった。日本人の医学部卒業生の中で米国での臨床医療活動を志す若手医師は今後、増加するものと思われる。しかし、日本の医学教育は独自に発展してきたところもあり、国際的標準化への対応には適さない部分が残されている。一方、アジア諸国を見ると、医学部・医科大学の世界標準化対応はすみやかに進行している。そこで日本においても国際化の問題は重要課題に急浮上してきたといえる。

この世界標準化の特徴の一つは、総合大学単位ではなく、医学部（医学科）単位で評価・認定を受けることにある。ところがその一方で、チームワーク医療の促進のために、医学系、薬学系及び保健学系学生の同時参加型教育の推進が求められてきている。また薬学系、保健学系においてもそれぞれの世界標準化教育に